

パネルディスカッション 2

「*H. pylori* 陰性時代における上部消化管疾患の内視鏡診療（自己免疫や好酸球性を含む）」

司会 布袋屋 修（虎の門病院消化器内科）

上山 浩也（順天堂大学医学部消化器内科）

近年、*H. pylori* 感染率の低下と除菌治療の普及により *H. pylori* 陰性時代へと変遷を遂げている。胃上皮性腫瘍については *H. pylori* 現感染胃癌から除菌後胃癌および未感染胃癌（噴門部・食道胃接合部癌、胃底腺型胃癌、腺窩上皮型胃腫瘍、印鑑細胞癌、遺伝性胃癌など）へと癌診療のパラダイムシフトが起こっている。同時に GERD やバレット食道などの酸関連疾患の増加や、好酸球性食道炎・胃炎、自己免疫性胃炎などの免疫関連疾患、PPI や PCAB に関連する胃病変、神経内分泌腫瘍などの胃腫瘍など、*H. pylori* 陰性時代に新たに注目すべき疾患も増えてきている。本セッションでは、*H. pylori* 陰性時代の上部消化管疾患に対する内視鏡診療における様々な課題を整理することに加え、特に内視鏡診断や治療に関する最新知識を深く理解するために、多数の演題応募を期待する。